

の闘争圧殺の総仕上げとして 試験を許さない

冬はもう終るとしている。

昨年の六月のバリケード爆発以来、既に八ヶ月を経過した今、我々は如何なる地點に存在し、又、どこへ行こうとしているのだろうか。

我々のあのバリケードはまさに現体制に於ける大学存続の根柢的矛盾が東日本大闘争を頂点とした全国の学園闘争の高揚、そして「大学立法」の危機意識によって喚起された間諜意識そのものの表現としてあつただろう。

しかしながらバリケードが解説されて以来、今日に至るまでの過程は確実に大学当局の一方的な收拾路線——それは言ふては言ふて暴力的手段のみならず、武力封鎖、試験除外といった本末を逆転するかの持つ強制力による日常化・精神化——の實績であった。その中にあつて我々は昨年2月の前期試験除外、本校地区ロットアウト解除、学館の解放＝非合法的使用等の雨いを雨い抜けて来た。

以上のことをふまえ、我々は今回の試験が持つ極めて重大な意味を見抜かなければならぬ。それはまさに一貫して行きなれできた大学当局の闘争压殺、即ち10.9宣言導入によるバリケード解説→授業開止→試験除外の誇張的の繰り上げとしてあり、これを以つて旧秩序の完全なる復活リテラリテの收拾となさんとするところのことである。それ故に我々にとって今回の試験を何らの批判もなく點してしまふことは、現在まで雨い、そして至つた闘争の範囲そのものを捨て去ることであり、同時に我々の今後の次第的闘争の基盤さえも失うことになつてしまつた。

大学当局がかつて荷り物入りで投出しに來た「自主改革案」なるものは一体どこにいたのかどうか、我々はあの貢献をもろいものを徹底的に批

判し、精神的対象でしかないことを確認した。

同時に大学当局にとどてもものはやそれは不要のものと化した、なぜならば、紛争に取組したからだ。まさにあの「自主改革案」なるものは闘争圧殺のためのアメであり、ムキが意図の導入であつたのだ、その意味は最近「自主改革案」なるものは見たこともないし、聞いたこともないではないか。農学部教授会については今年の一月段階で何ら改革案に対する終見解が出でないといふひとせなのである。かくして、まず先の改革さえできれば、学當局・農教教授会がどうして我々の「大學、教育とは」という根柢的雨いに応えることかでありますか。又、「話し合い」という彼等の大好きな言葉を、我々のたゞ重なる「話し合い」の要求の拒否によつてはやはり外らしいものとなつてしまつた。何故彼らが「話し合い」に応じられないのか、明らかである、詐し合えは彼らの欺瞞と幻想性、今までの犯罪的行為が全く裏蓋されるからである。

我々はかかる欺瞞と幻想の上に未だ嚴然として存在する「大學」の諸制度、諸構成そのものを解体し、当局の大學の近代合理主義的再編との系統的雨いを推し進めていかなければならぬ。そうすることによつて全國的に爆發していゝる高校生叛乱と連帶し、教育体制全体の叛乱を引き出すことができるであろう。そして4.28沖縄闘争、6月闘争の昇揚へと連絡せしめなければならぬ。

再戻問づ、我々はどうへ行こうとしているのか、旧秩序の復活を許し、近代合理主義的管理体制の中に包摶されてゆくのか、あるいは更に矛盾を拡大し、大學の本質をラジカルに根本的に裏蓋し、我々の雨いを前進せしめるのか。

一九七〇・三・一四